

■浅田宗伯 漢方医。西洋医学を論駁し、実績も上げて名声得る一方、国事にも奔走。創製した{浅田飴}に名を遺す。

あさだそうはく

・ ・ ・ ・ ・ 1815= 信濃国筑摩郡栗林村(長野県松本市島立)で、代々の医師浅田濟庵の長男に生まれる。

水野忠成老中 1818= 3歳 :

シホ木鳴滝塾 1824= 9歳 :

松本の儒学者木澤天況に詩書、医家熊谷珪碩に医書講読を学び、

日本外史 ・ ・ 1827=12歳 : 早くも、父の留守中、勝手に漢方薬を処方して黄疸患者が治ってしまったという。

密かに大志を抱くようになり、

シホ木追放 ・ 1829=14歳 : 高遠藩の藩校で中村仲棕に学び、

鼠小僧磔 ・ ・ 1832=17歳 : 一時帰郷後、_京都に行き、中西深齋の塾に入って古方を学び、傍ら、経書を猪飼敬所に、史学を頼山陽に学ぶ。大阪で大塩平八郎の塾も見学。

天保大飢饉始 1833=18歳 :

4年間の苦学の後、

滑稽+人情本 1835=20歳 :

帰郷。

・ ・ ・ ・ ・ 1836=21歳 : 江戸日本橋で医業を開業する伯父佐久間氏を頼って江戸に出、

大塩平八郎乱 1837=22歳 :

適塾+ワソ 1838=23歳 : 父危篤の報で帰郷、父の死去後、再び江戸に出ると、自宅が焼失しているという不幸のなか心機一転、_幕府医官の法眼本康宗円の知遇を得て宗伯と称し、その紹介で、当時の三大家、多紀元堅・小島宝素・喜多村栲窓に面会、医業大いに進み、

_高遠藩の藩医に迎えられ、徐々に患者が増えて医業が安定。

勅進帳初演 ・ 1840=25歳 :

天保改革弾圧 1842=27歳 :

阿部正弘首座 1845=30歳 :

・ ・ ・ ・ ・ 1848=33歳 : この年の患者は1000人を越え、_江戸でも名の知られた医家となる。

尊徳報徳論 ・ 1851=36歳 :

万次郎帰国 ・ 1852=37歳 : *「皇国名医伝」を著して、

ペリー来航 ・ 1853=38歳 :

安政大地震 ・ 1855=40歳 : _幕府の御目見医師となり、「医心方」校正のことにあたる。

五ヶ国条約 ・ 1858=43歳 : 年間患者数3000人近くになる。_「治癒編」「暴濁須知」を著す。_將軍徳川家茂に謁見して、徴士に列し、

安政の大獄 ・ 1859=44歳 : _幕府医学館で「医心方」の公刊事業に携わる。

桜田門外変 ・ 1860=45歳 :

遣欧使節 ・ ・ 1861=46歳 : 年間患者数4500人を越える。

この間、川路聖謨の主治医となって親交、小栗忠順との連絡掛を務めるなどして、ますます信頼され、

薩摩藩士密航 1865=50歳 : _フランス公使ロッシュの病気の際、諸治が効をみなかったので、幕府の命を受け、治療にあたり成功。これをたたえたフランス皇帝ナポレオン3世から自鳴鐘(時計)と殖揚(敷物)を贈られる。

薩長同盟 ・ ・ 1866=51歳 : この年、娘の夫が何者かに斬られる事件。*將軍徳川家茂の病状悪化、侍医に抜擢され、大阪城に赴き診察。西洋医より正確な診断下すも間に合わずに家茂死去するが、大奥当直番に任命され法眼となる。

明治維新 ・ ・ 1868=53歳 : 天璋院篤姫に頼まれ、江戸城無血開放に向けた西郷隆盛宛の書簡を運び、和宮からも多大の礼品。將軍慶喜が駿府に移るのに従い駿府に移るも、すぐに江戸に戻り、

戊辰戦争終 ・ 1869=54歳 :

維新後、人力車が一般的になるなか、駕籠での往診を貫き、

廃藩置県 ・ ・ 1871=56歳 : 維新前の日記を整理再構成した「橘黄年譜」を書き上げ、牛込横寺町に居を移し、隠居しようとしたが果たさず、診察室(勿誤薬室)を開き、サロン(輔仁会)を設けて、診療・子弟教育・著述出版にあたり、

明治6年政変 1873=58歳 :

佐賀の乱 ・ ・ 1874=59歳 : _ドイツ医学採用で押される漢方の伝統守るべく、浅草に漢方専門の病院(如月病院)を設立し院長に就任。

初の民間工場 1875=60歳 : 政府の医師資格試験実施決定に、漢方家六人で集まり会談、今後の対策を練り、漢詩を詠む。

大久保暗殺 ・ 1878=63歳 : 「勿誤薬室方函口訣」を著す。木挽町に漢方専門病院(博濟病院)を設立し、院長に就任。

琉球処分 ・ ・ 1879=64歳 : *漢方医家団結し、山田業広を社首として{温知社}を結成、政府方針に公然と立上る。生後間もない明宮(大正天皇)が危篤に陥った際、西洋医大物が多数控えているにも関わらず、漢方を信じる皇室の意向で侍医となり、その命を救って国体救済の大功労者となる。

・ ・ ・ ・ ・ 1880=65歳 : 温知社幹部が道士巾を被り参集し、漢詩を詠む。_「先哲医話」「皇国脚気考」などを刊行。

明治14年政変 1881=66歳 : _{温知社}の2代目社首となる。明治天皇の内親王滋宮が誕生、明宮同様治療を担当。

信頼していた弟子にも西洋医学に転じる者が出始め、

岩倉具視没 ・ 1883=68歳 : 和漢医学講習所を日本橋に開校。多忙につき温知社社首を辞任、浅井国幹が3代目社首になる。

秩父事件 ・ ・ 1884=69歳 : 西洋医代表者と漢方医代表者が会談。

帝国大学始 ・ 1886=71歳 : これまでの診療記録「橘窓書影」を刊行。

国民之友始 ・ 1887=72歳 : {温知社}が資金難で和漢医学講習所の建物売却、安置していた神農像を浅田邸に返還してくる。

初の対等条約 1888=73歳 : *宮中侍医を辞任。宮中養育改革で漢方医すべてが解任される。

帝国憲法公布 1889=74歳 : 機関誌(温知医談)はこの年まで続いて、{温知社}解散。この年、かつて浅田邸に長く出入りしていた堀内伊三郎が宗伯から褒美に貰った漢方のさらし水飴を、その息子伊太郎が「浅田宗伯先生直伝」で売り出したところ人気爆発、_現在に続く「浅田飴」の始まりとなる。

大本教 ・ ・ ・ 1892=77歳 : 足腰が弱り、熱海、箱根で温泉湯治しながらも、精力的に診察、執筆活動を行い、

日清戦争始 ・ 1894=79歳 : 往診後発病し、牛込横寺町の自邸で、_没した。

遺墨「和膽之説」は「和魂洋才」と同じ意で、西洋一辺倒への危惧が伺える。

油井富雄「浅田宗伯」,「没年日本史人物事典」,平凡社百科事典,「本朝医人伝」,